

令和2年度 **研究紀要** 第47集

児童生徒の「生涯学習力」を高める教育課程の編成

巻 頭 言 校長 藤井 慶博	1
研究の概要	2
1 研究主題設定の理由	
2 研究の内容と方法	
ワーキンググループによる研究	
はたらくワーキンググループ	4
1 はじめに（研究の目的）	
2 研究の内容と方法	
3 教育課程編成に向けた取組	
4 まとめ	
くらすワーキンググループ	12
1 はじめに（研究の目的）	
2 研究の内容と方法	
たのしむワーキンググループ	18
1 はじめに（研究の目的）	
2 研究の内容と方法	
3 研究の実際	
4 まとめ	
研究のまとめ	24
1 教育課程編成への提言	
2 成果と課題	
参考・引用文献一覧	26
あとがき 副校長 跡部 耕一	28
研究同人・奥付	
資料：2020年度 研究パンフレット	

研究紀要発刊にあたって

校長 藤井慶博

昨年度(平成31年度)より2か年にわたり「児童生徒の生涯学習力を高める教育課程の編成」というテーマの下、研究に取り組んで参りました。

我が国では「誰もが、障がいの有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会」の実現を目指しています。そのため、誰もが学び続けることのできる社会づくりに加え、人々の多様な生き方・在り方が尊重され、個性や得意分野を生かして参画できる社会であることが求められています。児童生徒一人一人に視点を移すと、学校で身に付けた知識・技能だけで、変化の激しい社会を生き抜くことはできないでしょう。刻々と変化する社会や状況に対して、自ら課題を見出し、課題解決のためにどのようにアプローチが必要なのかを考え、実行し、評価していく力が求められているとの思いからです。

1年目は、「生涯学習力とは何か?」という問いから研究を始め、生涯学習力を「主体的にヒト・モノ・コトに関わり、生涯にわたって学びに向かい、成長しようとする力」と捉え、研修会やワーキンググループを設置し、研究を進めてきました。その結果、生涯学習力を高めるためには「自己理解」と「問題発見」が必要であり、授業づくりにおいては「(ヒト・モノ・コト・地域・社会・学び・未来)とつながる」ことを基盤に、「かかわる」「きづく」「やってみる」という視点の重要性を確認しました。

2年目である今年度は、生涯学習力を高めるための教育課程を具体的に構想するため、「はたらく」「くらす」「たのしむ」といった3つのワーキンググループにおけるミーティングを重ねるとともに、研修会、授業研究会により校外の方々からも幅広く御意見をいただきながら研究をまとめてきました。その結果、小学部では、地域の方々との協働し、本校オリジナルの個別の教育支援計画「私の応援計画」(詳しくは本校HP参照)を作成し、それに基づく授業づくりにつなげていく可能性を導き出しました。中学部では、作業学習を中心に生徒の「気付き」を大切に「はたらく意欲」を高めるための支援を構想し、来年度の作業学習の改善につなげようとしています。高等部では「Dスタディ」という新たな領域を教育課程に位置付け「ヒト・モノ・コト」とつながるネットワークを生かした学びの基盤を構築してきました。

今後は、2か年の研究で構想した教育課程の実践と評価が必要です。とりわけ児童生徒の学びを丁寧に読み取るとともに、障がいの「社会モデル」の観点から、地域のヒト・モノ・コトがどのように障がいのある方々の学びや社会参加を包み込んでいくのかといった観点からの検証も必要と考えます。

末尾になりますが、本研究に全面的に御協力いただきました、文部科学省、秋田県教育委員会、秋田大学をはじめ、多くの方々に深謝申し上げます。

研究の概要

1 研究主題設定の理由

(1) 私の応援計画(個別の教育支援計画)の活用

本校では、平成26年度から28年度までの3年間、「ひと・地域・未来をつなぐ」をテーマに研究を行い、その中で児童生徒と学校、保護者、関係機関等をつなぐためのツールが必要であると考えた。そこで、個別の教育支援計画に着目し、平成27年度より本人と保護者が当事者意識をもって作ることができるように、名前を「私の応援計画」として、関係者と連携した支援を行うためのツールとして積極的に活用している。この計画は、児童生徒が「夢」や「願い」、「目標」を教師や保護者との対話の中から見だし、自分のよさや長所に着目しながら、本人が主体となって作成するものである。この実践を通して得られた成果は次の2点である。

適切な「教育的ニーズ」の把握

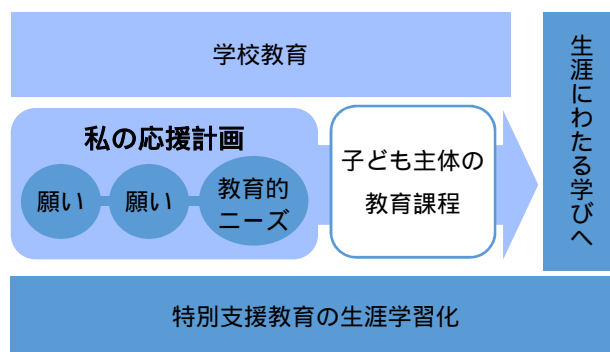
児童生徒の「思い」「願い」「夢」「なりたい自分」を教師が把握することで、児童生徒主体で教育課程を編成しようという意識が高まった。学ぶべきことを先に決めるのではなく、児童生徒が学校の教育に何を求めているかという視点で指導内容を選定、配列することで、本人主体の教育課程の編成が可能になった。学部ごとに実態とライフステージに応じた工夫をしながら、「教育的ニーズ」を把握している。

学びの主体は児童生徒

「私の応援計画」を活用した教育課程編成の新しいシステムが構築されたことで、児童生徒自身が学びの主体者であるという意識が高まった。児童生徒が「夢や願い」「目標」を自分の言葉で発信する機会が増え、日常的に「こんな自分になりたい」などの「願い」を話題にするようになった。

(2) 社会的背景

平成29年4月に文部科学大臣メッセージ「特別支援教育の生涯学習化に向けて」が出され、障害者の生涯を通じた多様な学習活動を支援するための取組が開始された。学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議報告「障害者の生涯学習の推進方策について - 誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して - 」では、学校教育における学びと学校卒業後の学びを接続し、生涯にわたって学び続けられるようにすることの重要性や、学校教育から卒業後の学びに円滑に移行するために、個別の教育支援計画活用の仕組みを強化する必要性などが述べられている。



(3) 本校のニーズより

言葉で気持ちを伝えることが難しい児童生徒の場合も、保護者や教師が「思い」を読み取りながら「願い」を把握することで、児童生徒主体の指導内容を設定することができ、自ら学びに向かう姿が多く見られるようになった。児童生徒自身が学びの主体であることを自覚し、何を学びたいか語れるようになってきたことは、生涯にわたって成長し続けるための力を育む素地となる。

本人、保護者、教師、地域、関係機関が一体となって、卒業後の社会生活を見据えた「生涯学習」という視点での教育活動を充実させるためには、学校生活の中でどのような力(資質・能力)を育むべきか見極めることが重要である。また、学校における教育資源にはどのようなものがあるか整理し、卒業後も活用できるような新たな資源を開拓する必要もある。さらに、児童生徒の在学中の姿だけでなく、学校卒業後の姿(働く・暮らす・楽しむ)も視野に入れるべきであると考えた。

以上の観点から、これまでの研究の成果を基に、児童生徒が生涯にわたって学びに向かい、成長しようとするための力を身に付けてほしいと願い、本研究主題を設定した。

2 研究の内容と方法

(1) 研究仮説

「生涯学習」につながる視点をもった教育課程を編成し、児童生徒個々のよさや長所に着目した実践を行うことで、主体的にヒト・モノ・コトに関わり、生涯にわたって学びに向かい、成長しようとする力（生涯学習力）を高めることができるだろう。

(2) 研究初年度（平成31年度） 平成31年度研究紀要第46集参照

生涯学習についての研修会の実施

- ・校内研修会（秋田大学 原 義彦 教授，秋田県生涯学習センター 主任社会教育主事 柏木 睦 氏）
- ・夏のセミナー（講演：あべけん太 氏 ダウン症のタレント）
- ・冬のセミナー（講演：井口啓太郎 氏 文部科学省障害者学習支援推進室）

3つのワーキンググループによる研究



リサーチグループ

生涯にわたって主体的に学び続けるために、学校で学んだことの何が活用され、何が必要かを明らかにするため、卒業生を対象にした調査を行い、結果を考察する。



資源活用グループ

生涯学習を行うには、地域資源の活用が不可欠である。本校が関わっている地域資源を整理するとともに、さらなる活用のために何が必要かを考察する。



MIグループ

自ら学びに向かうには、得意な学び方で十分に学習した経験が重要である。児童生徒個々のよさや長所に着目し、「MI（マルチ知能）」を活用した授業づくりを行う。

(3) 研究2年目（令和2年度）

生涯学習についての研修会の実施

- ・校内研修会（秋田県教育庁特別支援教育課管理主事 小山高志 氏
秋田県生涯学習センター主幹（兼）学習事業班長 皆川雅仁 氏
秋田県生涯学習センター主任社会教育主事 柏木 睦 氏
秋田県生涯学習センター社会教育主事補 栗田 寿 氏）
- ・夏のセミナー（講演：平井 威 氏 明星大学客員教授）
- ・公開研究協議会（講演：引地達也 氏 みんなの大学校長）

3つのワーキンググループが中心となった研究推進

卒業後の暮らしにつながる「はたらく（仕事）」「くらす（生活）」「たのしむ（余暇等）」の3観点で子どもの学びを見直すことにした。

生涯学習（Lifelong Learning）を見据えた教育課程を検討する「LLミーティング」を設定し、研究を進めた。



(4) 研究結果の発信

夏のセミナー，冬のセミナー，公開研究協議会，研究紀要，ホームページ等で発信

はたらくワーキンググループ

1 はじめに（研究の目的）

昨年度の研究から、本校高等部生徒に「在学中に学びたいこと」について調査した結果、43%の生徒が「作業学習や現場実習などで働くことを学びたい」「いろいろな職場を知りたい」と回答した。また、卒業生が在学中に役立った学習は「作業学習」「進路学習」と答える割合が高いことも明らかになった。これは、生徒が「働く」ことに関する学びに関心が高く、卒業後も役に立っていると考えていることが表れている。

また、就労面が安定していることが、余暇を楽しむことや生涯学習に向かうことの前提となることも明らかになった。

はたらくワーキンググループ（以下：はたらくWG）では、働くことに関する学びのニーズの高さと、豊かな生活の基盤となる、仕事を続けていく力の重要性から、「働く」視点での生涯学習力を高める教育課程について考える。有効な学習内容や環境、地域社会とのつながりの在り方を学部縦割りの視点で検討し、実践する。そこから見えてきたキーワードや成果と課題を、他のワーキンググループから出された提言と関連させながら教育課程の編成に生かしたい。

2 研究の内容と方法

（1）「働く」視点で考える生涯学習力の検討

「働く」という視点で「生涯学習力」を捉えるために、はたらくWGでワークショップを行った結果、「働く」ための要素は、「自分で立てた目標に向かう」「役割を果たす」「誰かの役に立つ」と、大きく三つに分類することができた。そして、その基盤には「働く意欲」が欠かせないことを確認した（図1）。

上岡(2013)は、「働く意欲がなければ働く生活の質を高めることはできません。質の高い働く生活が人生の質を高めます」と述べており、まさしく「働く意欲」が本校の目指す「生涯学習力の向上」につながると考える。

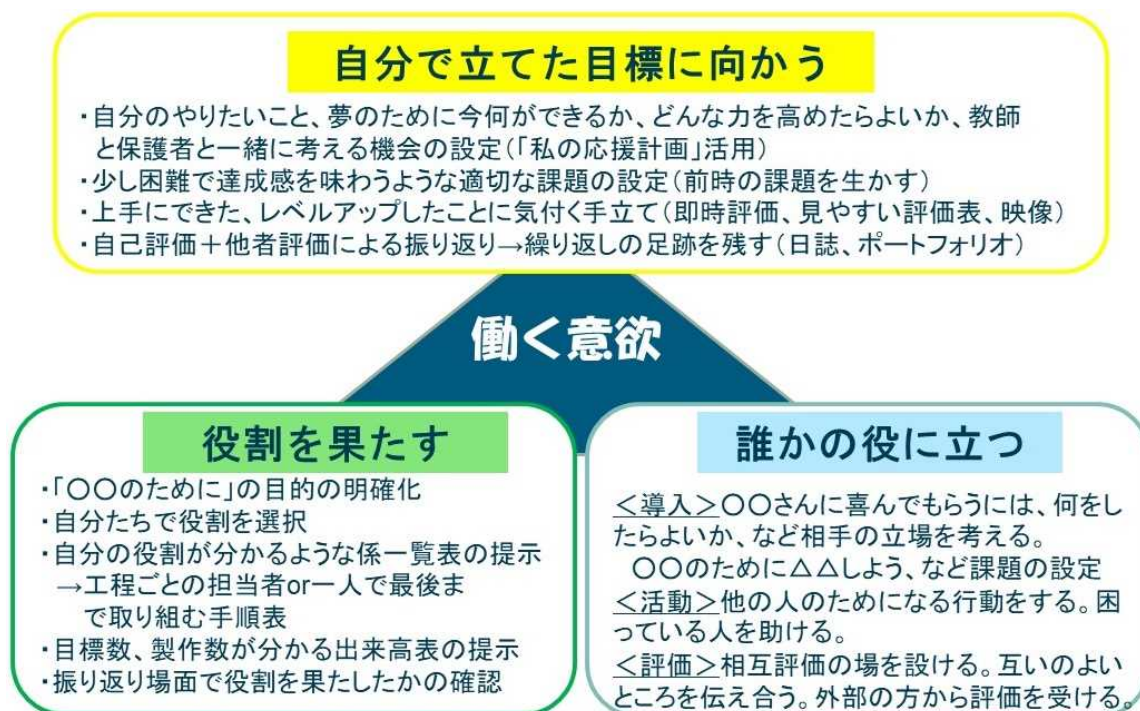


図1 働くための要素

(2) 「働く意欲」を高める授業づくり

「つながりミーティング」の実施

本校の生涯学習力を高める授業づくりのポイント「かかわる」「きづく」「やってみる」から、はたらくWGでは、「きづく」に着目した。「おもしろそう」「やってみたい」という内発的な興味・関心から、「なぜこうなるのか?」「どうしたらうまくいくのか?」という疑問をもち、「分かった」「できた」という課題解決につながる。そのプロセスが、児童生徒の「意欲の向上」につながると捉えた。

年間指導計画を基に、学部縦割りで学習内容を検討する「つながりミーティング」では、中学部の作業学習で生徒に「気付いてほしい視点」として以下の意見が出された。主に「自己理解」と「他者理解」に分けることができた。

はたらくWGで出された「生徒に気付いてほしい視点」

自己理解

- ・自分の調子
- ・自分のよさや課題
- ・自分の成長
- ・どうすれば、うまく作れるか

他者理解

- ・客のニーズ
- ・何のために作るか
- ・製品の価値(よさ)
- ・友達の頑張り

「はたらく検討会」と全校授業研究会の実施

はたらくWGと中学部職員が共に作業学習を検討する「はたらく検討会」では、生徒の「気付き」を次時に生かせるよう、作業日誌の様式を検討したり、生徒一人一人の「気付き」に関するエピソードを共有したりした。全校授業研究会では、働く意欲を高めるための「きっかけや背景」、「働く意欲につながる視点」について、ワークショップを基に他学部の視点から意見交換、協議を行い、研究協力者から講評をいただいた。

終日作業の振り返りを記入する場面で・・・

Sさん

検品は簡単でした

検品中の動画を見てみましょう

あ・・・隙間がありました **気付き**

ということは?

検品はまだ難しいです
頑張りたいです **意欲**

教師

作業日誌の様式変更による変容

7月20日(月) 天気(晴れ)

作業日誌

気づき

・チェック項目が多い

・目標と評価が曖昧

・気付きが、次回気を付けること(意欲)につながる

気付きが見られた場面

気付きの背景
きっかけ

働く意欲につながる場面

成功体験のつみかさね

気づきの背景

働く意欲につながる場面

なぜしたのか



< 講評 抜粋 > 秋田大学教育文化学部准教授 前原 和明 先生

- ・教師にとっては「気付いてほしいこと」も、生徒にとっては「認めたくない」こともある。
- ・「目的」だけでなく、「ストーリー（見通し）」を伝えたい。
- ・「できないからできるようになる」スキルの向上だけでなく、「できなくても、どんな関係性だったら楽しいのか、どのように助けてもらうのか」が大切。誰かと比較すると将来くじける。
- ・「できない」「できる」を知ることは、「気付き」のために必要。スキルを単純に教えるのではなく、教育の中でどのように必要性を感じさせるかがポイント。
- ・「気付き」を生徒に分かりやすく言語化することも教師の専門性。

< 講評 抜粋 > 障害者就業・生活支援センター長 牧野 真吾 氏

- ・「楽しい仕事」はないけれど、「楽しく仕事」はできる。授業にも「楽しい要素」を入れたい。
- ・卒業生の立場で考えると、「働く」上で大切なことは「自己有用感」などより「お金をもらう」こと。
- ・自分が行った「行為」に対する「反応（利益）」がモチベーションになる。利益が生まれなかったら、それを分析すればよい。「ストーリー」と、自分を客観視するための「メタ認知」の視点が大切。
- ・製品の価値は、不特定多数の方が求める価値だが、企業の視点からすると、誰に売るのが、ターゲットを絞りたい。「売れたらおもしろい」を感じてほしい
- ・「ほうれんそう」よりも、今は「かくれんぼう（確認・連絡・報告）」を身に付けてほしい。

(3) 「働く意欲」を高める要因の検討

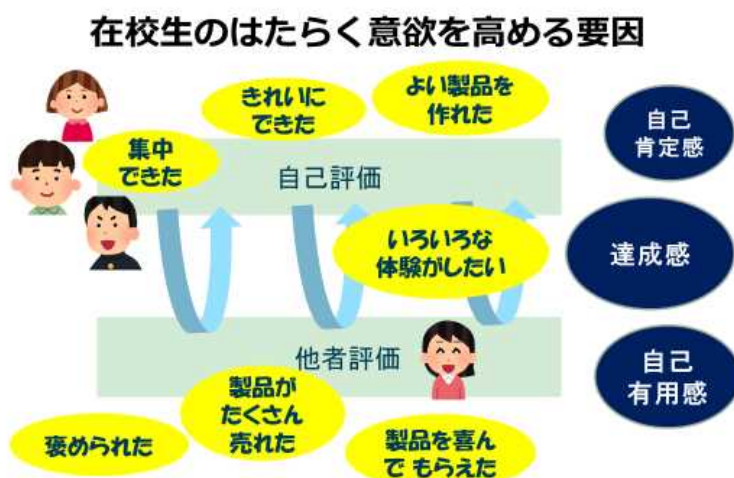
在校生と卒業生へのインタビュー分析

「働く意欲」を高めるための要因を、本校在校生と卒業生数名にインタビューを行い、その受け答えから明らかにしようと考えた。「働くことは好きか、嫌いか。その理由は何か?」「どんなことがうれしいか。辛いか?その理由は何か?」「もっと頑張りたいと思うのは、どんなときか?」の項目で質問を行い、その答えから見えてきたことを分析した。

ア 在校生（中学部生4名、高等部生6名）へのインタビューから見えてきたこと

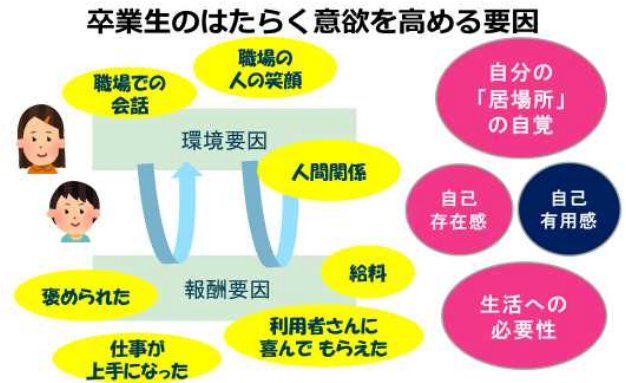
在校生のインタビューから、9割の生徒が「働くことが好き」ということが明らかになった。「きれいにできたとき」「よい製品が作れたとき」など、自己評価が高まったとき、「褒められたとき」「製品を喜んでもらえたとき」など、他者からの評価が意欲に結び付いているケースが見られた。

今年度は実際に客に対応する販売活動が行われなかったが、「客に喜んでもらいたい」という思いが意欲に結び付いている生徒もいた。



イ卒業生（一般就労1名，就労継続支援B型1名）へのインタビューから見てきたこと

卒業生へのインタビューからは，職場の人間関係（働きやすい雰囲気）などの環境要因，「給料がもらえる」や「利用者に喜んでもらえた」などの報酬要因が見られた。一名の卒業生は「働くことは好きではない」と話しながらも，「自分の居場所があるという自覚」「実生活への必要性」に言及し，それが「働き続ける意欲」に結び付いていることが明らかになった。



他校の実践から見てきたこと（夏のセミナーより）

8月に本校で実施した「夏のセミナー」では，県内外6名の先生方より，「働く意欲」が高まるための具体的な実践例をアンケートで答えていただいた。以下に抜粋を記載する。

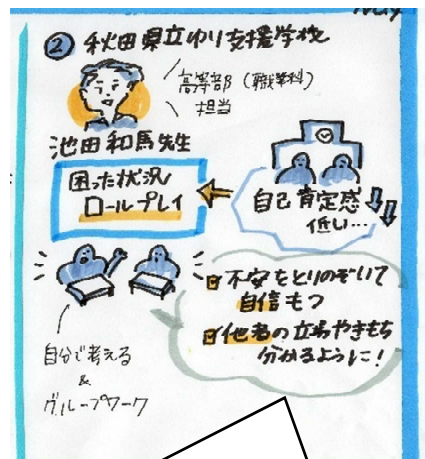
ア「〇〇のために〇〇しよう」と，生徒が活動する上で目的や楽しみをもてるような工夫

- ・定期的に自分の未来予想図（1年後，卒業後，10年後）を作成する活動。
- ・学習の成果が，地域や社会につながっていると伝える（よい製品を作るということは，売れるだけでなく，誰かを幸せにできる。製品や作業班の社会的価値を高めることにつながる）。
- ・スポーツ観戦が好きな生徒が多く，そのためにお金を貯めたり，スマートフォンを正しく使えたりする必要があるなど，日頃から将来の働く目的について話題にする。
- ・「ができると，将来をするときにで役立つからやろう」とできる限り具体的な展望を伝えて，意欲を湧かせたり意義を感じさせたりすることを意識している。



イ生徒自身の「気付き」を深める工夫

- ・自分の強み（希望業種に合った適性）を考える学習（実習事前学習などに関連させて）を計画，実施する。
- ・体調やその日の気分などで作業に身が入らないときに，自分自身でどう対応すればよいか考えたり，やりとりしたりする機会を設定する。
- ・生徒によっては質問の答えを選択できるようにする。気づきの発言を黒板等に記録する。
- ・話し合い活動で自分との違いを考えたり，相手のよいところを認め合ったりする場を設定する。
- ・困った場面への対応の仕方や相手の立場を考えることを，ロールプレイを通して学ぶ。



「夏のセミナー」では，他校の実践，本校のインタビュー分析を Zoom で共有し，情報交換，意見交換を行った。まちづくりファシリテーターの平元美沙緒氏からは，グラフィックレコーディングの協力をいただいた。

3 教育課程編成に向けた取組

(1) 働く意欲を高めるポイントの整理

「働く意欲」を高める授業づくりの実践、「働く意欲」を高める要因の検討を通して、意欲を高めるための様々なキーワードが出された。はたらくWGはそのキーワードの中から、「ストーリー」「気付き」を特に大切にしたいと考えた。「私の応援計画」を活用する中で、生徒自身が「気付き」を基に自己理解を深め、「将来へのつながり（時間軸）」「地域社会へのつながり（空間軸）」を基に自分なりの「ストーリー」を考えるようになってほしい。この二つの視点は、生涯学習力を高めるための教育課程の編成のポイント（プランニング、コネクト、セレクト）にも結び付くと考えた。

「働く意欲を高める」ポイント

「〇〇のために△△する」のような働く上での目的や楽しみ（**ストーリー**）をもつ



「働く意欲を高める」ポイント

「自分はこれが得意（苦手）」「〇〇したら、うまくいった」など、「**気付き**」を基に自ら取り組もうとする



働く意欲を高めるための教育課程編成のポイント

Planning 自分の将来に対する見通し（イメージ）をもち、主体的に計画・実行する。

☆中高作業学習の連携

作業コラボ会議・・・職員が「態度面」「作業製品面」に関して共通理解
代表者会議・・・作業班代表が情報交換「高から学びたいこと」「中に伝えたいこと」

Connect 身の回りの地域社会（働く場所、製品販売できる場所など）について学ぶ。

☆製品販売に向けた連携

販売会に向け気を付けることを経験のある高等部生徒が中学部生徒に伝達
（どんな製品が売れるか、コラボできるか、など）

Select 自分が得意な活動、好きな活動などが分かり、自分で選択する。

☆授業の工夫

希望する作業班、作業内容を自ら選択する場面の設定
目標設定と振り返りがしやすい工夫（作業日誌の工夫、板書の工夫）

(2) 教育課程の編成に向けて

学部間の連携に向けて

はたらくWGでは今年度、中学部と高等部の作業学習について、連携を深めてきた。「作業学習コラボ会議」は、教員間で「態度面」「作業製品面」の両面から、協働できる点を検討し、「作業学習代表者会議」は、中・高の作業学習の代表生徒（各班1, 2名）が集まり、態度面や作業面で「中学部に伝えたいこと」「高等部に質問したいこと」を意見交換し、作業製品として連携できそうなことについてもアイデアを出し合った。

<高等部からの意見>

サービス班・・・**地域貢献活動**（ありがとうと言われる喜び）
汚れを残さないような拭き方の工夫（テーブル、窓）
コーヒースタは同じ味にするために、時間・水を一定に



陶芸班・・・**質の高い製品作り**（カレー皿作りなど）
場面に応じた挨拶、集中力が大切
石こう型に泥を流し込む作業は難しく大変



ハンドクラフト班・・・**注文にすぐ対応できるように予備の準備**
さをり織りが人気（トートバッグなど）
失敗したらすぐに報告、相手を見ての挨拶が大切



<中学部からの意見>

- ・働くために必要なことを教えてもらった（立ち仕事多く、**体力が必要**）
- ・**挨拶**や、**集中力**が大切
- ・さをり織りなど、**丁寧な作業**が手本になった



「作業学習代表者会議」の成果

生徒の意識の変化

- 中学部・・・高等部に対する**見通し**，
先輩への憧れ
- 高等部・・・役に立っているという
自己有用感 責任感

コラボ製品の検討例

- ・高等部サービス班のコーヒースタに合う**コースター**を中学部クラフト班が試作
- ・さをり織りの「はぎれ」を**中学部のバッグ**作りに活用
- ・高等部の製品販売に**エコバッグ**を活用



中学部、高等部生徒が実際に互いの作業製品を見合い、それぞれのよさに気付き、認め合い、作業学習で大事にしていることを確認し合う貴重な時間となった。中学部は、先輩から学んだことを同じ作業班のメンバーに伝えることで学びのつながりが見られ、高等部生徒は後輩に教えることで、普段大切にしていることを改めて意識するとともに、自身の自己有用感や責任感にも結び付いた。

今年度、作業製品を販売する機会は少なかったが、今まで各学部で実施していた販売会を、中・高合同の販売会「わかはとショップ」と位置付け、共にオリエンテーションで学び、製品準備や実際の販売も共同で行うことができた。来年度に向けて、作業製品販売の目的を共通理解し、生徒自身がさらに意欲をもって取り組めるよう、具体的な計画を立案する。




教育課程編成のスケジュール（中学部）


中学部では、今年度の10月から3月まで、「働く意欲を高めるための教育課程編成のポイント」を基に、「小・中・高の連携」「地域との連携」「作業学習の検討」という視点で計画的に検討を行った。中学部と高等部の教員のみならず、生徒同士が代表者会議で情報交換、意見交換をする中で、多くの発見が見られた。検討を重ねる中で、中学部の作業学習の時間を増やす必要性や、現状の作業班の見直しの必要性が話題になり、中学部の「作業学習の時間を一時間増やす」「作業学習のねらいを焦点化し、クラフト班、ソーイング班、ファーム班という三つの作業班に編成し直す」こととし、来年度に向けた準備を進めた。

中学部 教育課程編成に向けて（はたらく視点より）


		10月	11月	12月	1月	2月	3月
地域との連携			通の市の振り返り		地域の人材活用		
	作業販売	高3から学ぶ会 (通の市)	作業製品販売 わかはと祭(カタログ注文)		来年度の販売会に向けて ・販売、啓発計画 ・高等部と連携		
小中高の連携		製品販売に向けたアイデア				製品販売会	
	進路学習	中3現場実習見学 応援計画振り返り	高等部現場 実習報告会		終日作業 高等部体験 職場体験	応援計画振り返り つながりマップ活用	
	中高連携		中高作業 コラボ会議 (職員)	中高作業 代表者会議 (生徒)		中高作業 代表者会議 (生徒)	
	小中連携			小6 作業体験			
作業学習の検討	作業班の検討		現状の課題の整理		新たな作業班の決定 ・新年度に向けた計画・準備		
	作業時間		来年度の案を検討 →1h増やす		新たな案で試行		




紙工班



クラフト班



ハーブ加工班



中学部作業班

クラフト班

CRAFT TEAM

- 簡単な道具（はさみなど）を安全に扱う力
- 手先や指先を上手に使う力
- 色彩デザイン

中学部作業班

ソーイング班

SEWING TEAM

- ミシン等の基本的な使い方の習得
- 素材に応じた扱い方
- 確実性よく見て合わせる安全に配慮する

中学部作業班

ファーム班

FARM TEAM

- 農作業に使う道具の扱い方
- 体力 根気 持久力
- 作物が成長する姿を見通す

4 まとめ（今後に向けて）

はたらくWGの取組より、生涯にわたって学び続けることの一助となる「働き続ける力」を育てるためには、「働く意欲」が基盤であり、意欲を高めるためには、「ストーリー（働く上での目的や楽しみを見付ける、など）」「気付き（自分自身を知る、など）の視点が大切であることが分かった。そして、その視点を実際の教育課程の編成として具現化するためには、学部縦割りの「学びの積み重ね」と、地域社会と共に学ぶ「学びのネットワーク」の視点も欠かすことができない。それは、他のWGの実践からも明らかになっている。

今年度、はたらくWGは中学部の作業学習の授業実践と関連させながら研究を進めてきた。今年度の実践を踏まえ、来年度は下表のように「小・中・高のつながり」「地域社会とのつながり」をより意識し、計画的に実践したい。そして実践後は授業を含めてしっかりと評価し、見えてきた課題について、改善を図っていききたい。その一連の流れが、本校研究「生涯学習力を高める教育課程の編成」の具現化に結び付くと捉えている。

生涯学習力につながる「働く」教育課程(中学部案)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
行事等	前期始業式 入学式 新入生歓迎会 全校運動レク	副校教育実習	宿泊学習	全校集会 半校集会	夏季休業 半校まつり 全校集会	主幹教育実習 修学旅行	前期終業式 秋季休業 後期始業式	介護等体験 わかはと祭	全校集会 冬季休業 小中入学普通 寺	高入学普通 寺 全校集会 公立研究協議会	生徒会選挙 卒業を祝う会	卒業式 修了式 春季休業
総合的な学習の時間(進路)	応援計画オリ (作り方) ゆめシート+ 応援計画を 作る(学級) 生徒個別面談 (→保護者面談)	掲示開始	高等部 現場実習 から学ぶ	働くために (進路指導 主事講話)		後期応援計画 オリ~私の夢 ゆめシート+応援計画を 作る(学級) 生徒個別面談 (→保護者面談) つながりマップ作成		高等部 現場実習 から学ぶ			評価応援計画 オリ~まとめ ゆめシート+応援計画を 作る(学級) 生徒個別面談 (→保護者面談)	
作業学習	作業 オリ	布川造園から 学ぶ①	第1回 終日作業	中高 代表者 会議①	布川造園から 学ぶ②	布川造園から 学ぶ③			職場体験 に向けて 先輩から 学ぶ 中高 代表者 会議②	職場体験 (2,3年) 高等部 作業体験 (1年) 第2回 終日作業		
	仕事を覚えよう		役割を果たそう		誰かの役に立とう			目標に向かって協力しよう				
販売会			通の市				通の市	わかはと祭 製品販売			わかはと ショップ	
高等部		通の市	I期現場実習	わかはと ショップ		通の市	II期現場実習 わかはと ショップ		Dスタ セレクト スタディ			
小学部						小6作業 学習見学		小6作業 学習体験				

くらすワーキンググループ

1 はじめに（研究の目的）

「くらす」を切り口にし、生涯学習力を高める教育課程の編成に必要な要素や体制づくり、次年度の高等部の教育課程について提案する。

2 研究の内容と方法

くらすワーキンググループ(以下:くらすWG)では、「くらす」の捉えについてのワークショップ、授業づくり、WGの提言、高等部の教育課程の四点について検討を行った。

くらすWGの研究協力者として、右の三者に依頼し、各分野からの情報提供や助言をいただきながら研究を進めた。

研究協力者

小山高志氏（特別支援教育課 管理主事）

* 障害者の生涯学習や特別支援教育の動向

櫻田 武氏（大仙市教委 参事兼指導主事）

* 教科、問題発見・解決やユニバーサルデザインの観点を含めた授業づくり

牧野真悟氏（障害者就業・生活支援センター長）

* 卒業生の就業や生活面の相談、支援事例、今後の展望

(1) くらすワーキンググループでの検討

くらすワーキンググループの方向性について

ア「くらす」に関わる学習内容や行動

くらすWGでは、WGでの研究を進めるに当たり、学校で扱っている学習内容、育成する力について、学部ごとにまとめた(図1)。各学部において、「くらす」に関わる学習内容は、「衣」「食」「住」「人間関係」に分類することができた。次に、社会人の一日の生活に着目し、行動を洗い出した(図2)。この二つを挙げた段階で「くらす」に関わる内容は、幅広く、多岐にわたることが共有できた。

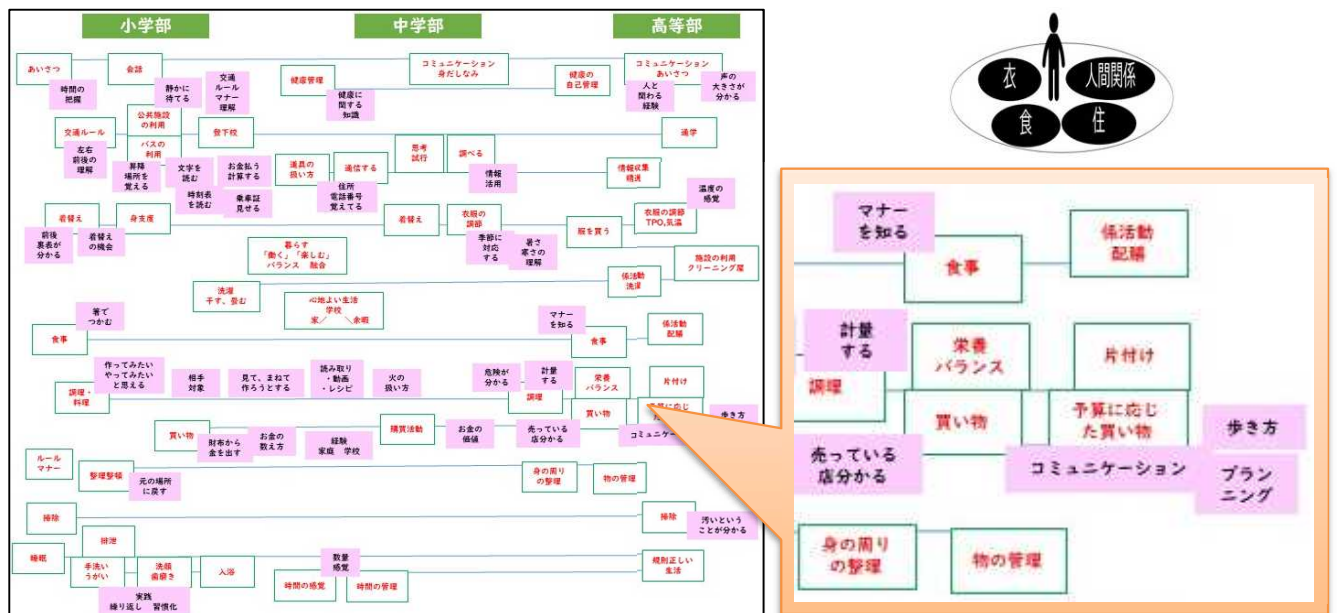


図1 学校で扱っている「くらす」に関わる学習内容



図2 社会人の1日の行動

イテーマの絞り込み

「くらす」に関わる内容は、幅広く、多岐にわたることから、研究協力者の助言などを基に、四つの側面から今後の検討していくテーマの絞り込みを行った（図3）。

「くらす」の内容は、「くらす」に関わり学校で扱う内容は幅広く、多岐にわたること。また、障害者就業・生活支援センター長の牧野氏の助言から、卒業生の支援内容として、自宅よりも地域での行動の方が多くことから、地域での行動に着目すること。生涯学習の側面からは、秋田県教育庁特別支援教育課管理主事の小山氏の助言を基に、「人との出会い、つながり、関わりを充実させること」が挙げられること。生徒の学びの側面からは、くらすWGは、高等部の授業づくりと連携し進めている研究であることから、今年度から開設した問題発見、問題解決を主眼とした学習「Dスタディ」と内容が重なること。教師の思いの側面からは、子どもたちが地域生活への興味・関心を広げ、地域との関わり方などを知ってほしいこと。以上の四つの側面から「みんなが使える場所の利用」について検討することにした。



図3 テーマの設定理由

ウ高等部生徒へのアンケート調査

高等部生徒22名に対して、公共施設等に関わるアンケートを実施した。公共施設等の選定は、秋田市のホームページを参考に図4の公共施設等に関するものとし、認知状況や利用状況、今後の利用希望に関する選択制と記述式でのアンケートを行った。

結果は、認知、利用状況ともに、学年が進行するにつれ高くなる傾向が見られた（図5）。学校で行われる学習や友達の影響が要因の一つと推察される。また、施設に関しては、認知、利用状況ともに、社会教育施設や集会施設が、特に低い値になった。

今後の利用希望に関しては、利用を希望する理由を四点に分類することができた（図6）。

これまで自分が行う必要はなかったが、社会人や卒業後の生活に向けてやってみたいという「必要性」、一度体験（学習）し、また利用したい、次は一人で行きたいという「経験」、友達や先輩が利用していることが分かり、一緒にやってみたいという「人との出会い」、やりたいが、やる場所が分からないという「情報」に関することが見られた。

アンケートから、在学中の学習や先輩や友達などの存在の大切さ、「みんなが使える場所」について、WGで検討していく意義を確認することができた。

図書館	博物館・美術館	市民サービスセンター
集会施設・コミュニティセンター	体育館・公園	
ホール	宿泊施設	観光施設
郵便局	病院	市役所
銀行	交番・派出所	
娯楽施設	食品を買う場所	衣服を買う場所

図4 アンケートに用いた公共施設等一覧

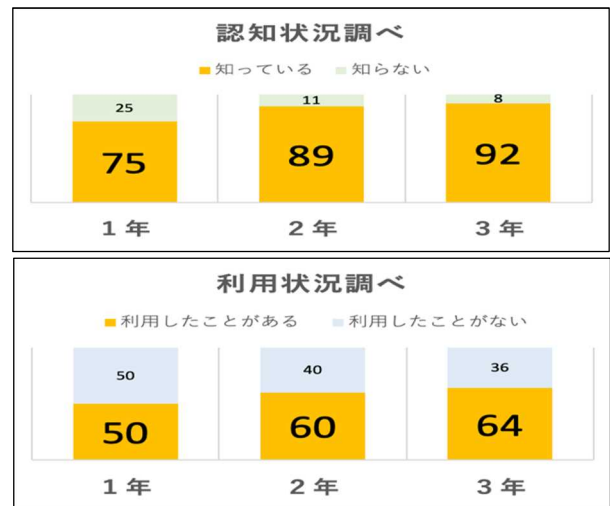


図5 学年ごとの認知状況、利用状況

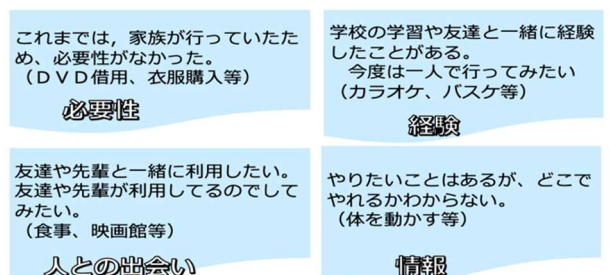


図6 今後の利用希望理由

夏のセミナー

各分野の方々に参加していただき卒業後の支援内容の情報「『みんなが使える場所』を上手に利用するために」の話題提供をいただいた。また、参加者との意見交換では、「情報発信」「人とのつながり」「ロールモデル」について意見を深めた(図7:グラフィックレコーディングの記録より)。

夏のセミナーでいただいた示唆や意見交換を集約すると、図8に示すように、学校においては、「めあてとまとめの整合性」を高めることや、「ロールモデル」が存在することが重要であること。社会においては、頼れる存在がいることや、ネットワークづくり、情報につながることで、情報につながる人につながる大切であることが分かる。

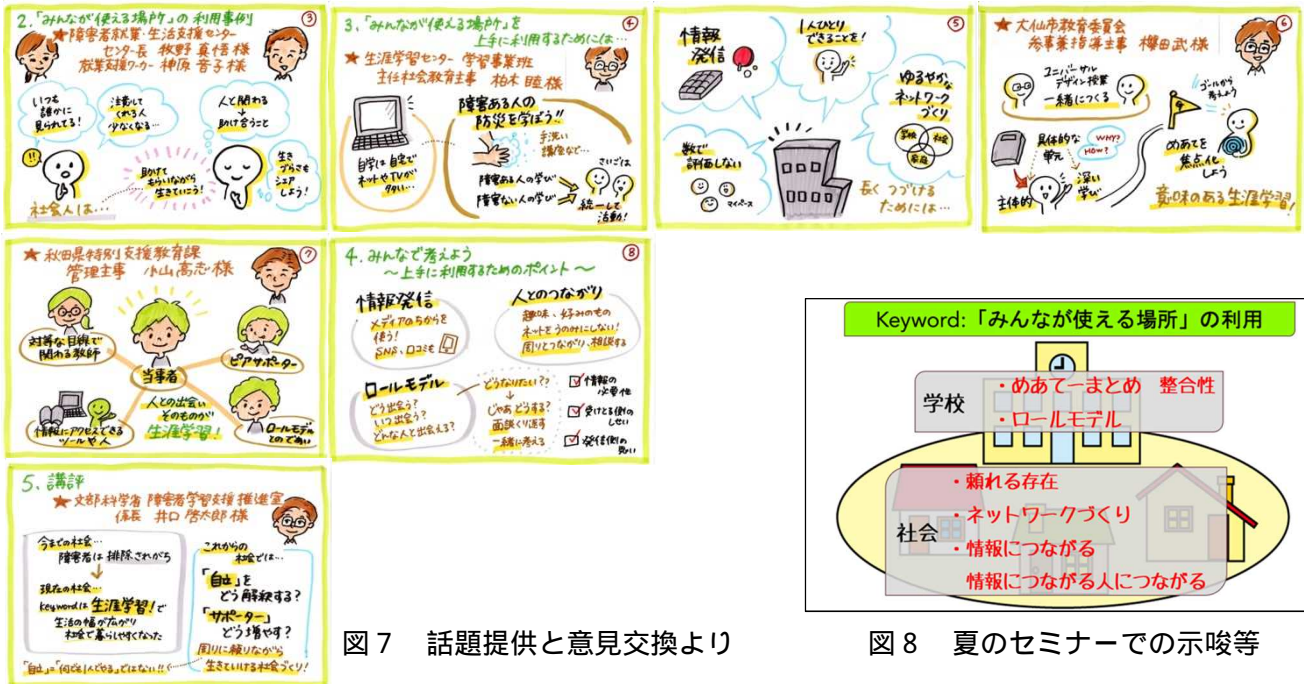


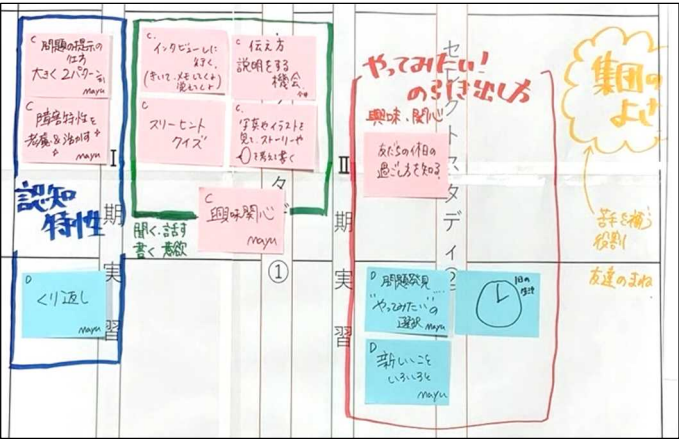
図7 話題提供と意見交換より

図8 夏のセミナーでの示唆等

(2) 授業づくり

つながりミーティング(高等部, くらすWG)

今年度新たに開設した学習「Dスタディ」について、年間指導計画作成前(5月)に高等部職員と、くらすWG職員で検討する機会を設定した。Dスタディのグループ担当職員から所属する生徒の学びの特性や学習のねらいについて説明を受けた後に、学習内容や手立てについてのアイデアを出し合った。Dスタディについて検討した後は、それぞれが自分の学部や学級の学習に生かせるポイントも出し合った。全体を通して、出された意見を集約すると、以下の四点にまとめることができた。



- 「失敗してもやってみる機会の設定」
- 「意図的に他者と関わりをもったり、用事を果たしたりする機会の設定」
- 「経験を広げる機会(直接体験する場面, 人の経験を知る場面)の設定」
- 「児童生徒が自分で考えられる機会の設定」

つながりミーティングを通して、学習の展開やねらいについて考えを整理できた。

授業づくり検討会（高等部，くらすWG，研究協力者：櫻田氏）

研究協力者の櫻田氏をお招きし，高等部職員とくらすWG職員で全校授業研究会に向けての授業づくり検討会を行った。年間指導計画やグループのねらいについては事前に高等部で検討していたため，単元計画を中心に検討した。夏のセミナーで，櫻田氏から「めあてとまとめの整合性」「生徒主体の学び」について示唆を得ていたことも踏まえ，単元の検討を行った。検討の中では，目的を明確にすること（焦点化）や生徒へのフィードバックの方法（個の学び 全体の学び），めあてを達成するための単元の展開などについて意見が出された。この検討会で出された方向性を基に，全校授業研究会の提示授業に向け，単元を通して，生徒がめあてを意識し，必要感を感じながら学習に臨めるような単元を展開し，手立てを検討していくことにした。



全校授業研究会

夏のセミナーで得られた示唆と授業づくり検討会を踏まえて，全校授業研究会では，Dスタディの授業を提示した。提示したグループでは，それぞれがやりたいことや行ってみたい場所を出し合い，希望を実現するために，自分たちで学ぶことを話し合い，計画を実行するために必要な事柄を学んだり，実践したりするという展開を行った。当初は，飲食店で飲食を行う予定としていたが，社会の状況等を踏まえて，飲食店でテイクアウトすることを目的とした学習を行った。その中で，生徒たちの「うまかった」「次は をやってみたい」という満足感や意欲や興味の高まりが多く見られた。



全校授業研究会では，協議1「生徒が気付く姿を引き出す手立てについて」と協議2「みんなが使える場所を上手に使うポイント」を行った。協議の中では，以下の点が主な話題として挙がった。

- 「ヒト，モノ，コトとつながる，関わることの重要性」
- 「ゆるやかなネットワークを構築する必要性」

授業実践

高等部Dスタディと同様の授業実践は，小・中学部でも行っている。各学部で「みんなが使える場所」の利用や，自分たちの希望や考えたことを地域の方と関わりながら実現する学習を展開している。



(3) くらすワーキンググループの提案～「ゆるねっと」の作成と活用～

夏のセミナー，全校授業研究会ともに，「ゆるやかなネットワークづくり」がキーワードとして挙がってきている。つまり，生涯学習力を高める上で，重要な要素であると言える。では，「ゆるやかなネットワーク」づくりは，卒業後の一人一人が行うことで，在学中の話ではないかというところではない。在学中から，ネットワークづくりに向けて，種をまく，その種を芽ぶかせる，出た芽を育て，

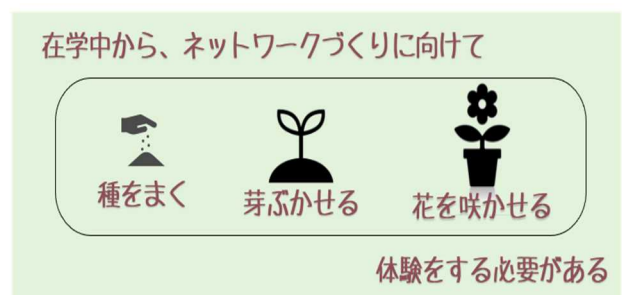


図9

花を咲かせる体験をする必要があると考える(図9)。
種をまく,その種を芽ぶかせる,出た芽を育て,花を咲かせる体験とは,ヒト,モノ,コトと関わることで「楽しい」「心地よい」「充実した」「また,やりたい」というような快の感情を得たり,満足感や充足感,意欲の向上に結び付いたりする体験を指す(図10)。このような体験を小学部段階から継続的に積み重ねる必要があると考える。

加えて,この種をまく,その種を芽ぶかせる,出た芽を育て,花を咲かせる体験や地域とのネットワークを,その学部や学年だけで留めるのではなく,学校として,その可能性を広げていくことが重要であると考える。例えば,小学部でつながっている地域のヒト,モノ,コトを中学部でも利用したり,高等部でも共有したりするシステムがあれば可能性が広がるはずである(図11)。

そこで,卒業後も活用できるネットワークを構築していくための素地づくり,そして,各学部で構築しているネットワークを共有する体制づくりを提案する。

地域社会とのつながりを可視化するのが,ゆるやかなネットワークづくりのためのマップ,通称「ゆるねっと」である。「ゆるねっと」は,Google マイマップのアプリケーションを用いて作成した。

「ゆるねっと」を実現させるメリットとして,次のことが考えられる。

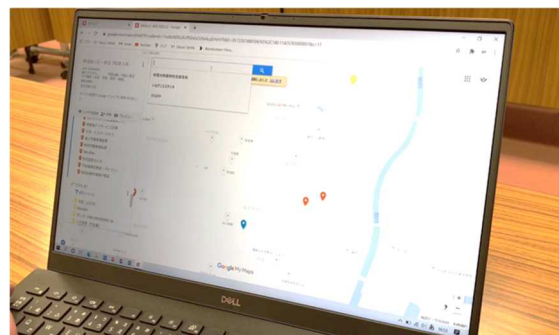
- 人が変わっても持続可能な,地域とともに学ぶ体制
- 新任教師でも,地域に根ざした授業をスムーズに計画可能
- 昨年度の地域資源をまとめた研究成果の利活用
- 他学部とのつながりの薄さという本校の課題に対する解決の一助
- 上学年の学習が分かり,児童生徒のロールモデルをつくる手立て
- 生徒のアイデアを授業に生かす手立て



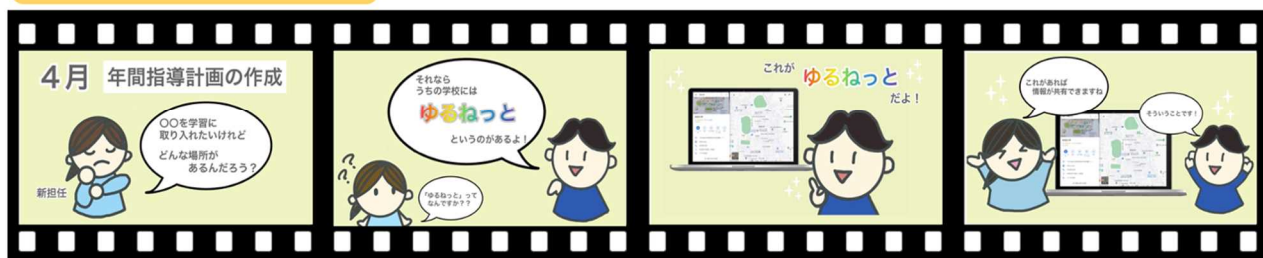
図10



図11



「ゆるねっと」使用例



以上のことから,くらすWGでは「ゆるやかなネットワーク」を構築していくために,学校の職員が気軽に閲覧し,利活用することができる「ゆるまっぷ」を作成することを提案する。

(4) 教育課程の方向性

くらすWGで検討してきた内容や提案，授業実践を基に，次年度の高等部の教育課程を検討した。

Dスタディについて

今年度のDスタディは，1コマ(50分)，週2日の実施であった。1コマずつの実施は，生徒にとって分かりやすい学び方となったとの評価から，次年度も継続していく。一方で，「みんなが使える場所」を訪問しての利用を考慮すると1コマでの実施が難しいため，年間通して3コマ連続の学習時間を定期的実施する(表1)。

また，今年度は木曜日と金曜日に実施していたが，他の学習との関連や教育的効果を考慮し実施曜日を変更する(表2)。

表1 次年度Dスタディ日程(案)

Dスタディ日程(案)			外: 3時間どり日	発: 学習の様子発表日	セレクトスタディ	
4月	14日 水	21日 水	7月	2日 金	1月	19日 水
	23日 金	30日 金		7日 水		21日 金
	28日 水			9日 金		26日 水
	7日 金			14日 水		28日 水
	12日 水			16日 金		2日 水
	14日 金			21日 水		4日 金
	19日 水			27日 金		18日 金
	21日 金			1日 水		25日 金
	26日 水			3日 金		2日 水
	28日 金			8日 水		9日 水
	2日 水			10日 金		11日 金
	4日 金			15日 水		16日 水
	23日 水			22日 水		
	25日 金			24日 金		
	30日 水			29日 水		
				1日 水		
				3日 金		
				8日 水		
				10日 金		
				15日 水		
				17日 金		
				22日 水		

表2 次年度週時程(案)

時間	月	火	水	木	金
8:30	ADL(10)	ADL(10)	ADL(10)	ADL(10)	ADL(10)
9:00	運動(20)	運動(20)	運動(20)	運動(20)	運動(20)
9:30	SHR(25)	SHR(25)	SHR(25)	SHR(25)	SHR(25)
10:00	全校集会 委員会 学級集会 (50)	作業学習 (90)	Dスタディ (50)	作業学習 (90)	Dスタディ (50)
10:30	休憩(10)	休憩(10)	休憩(10)	休憩(10)	休憩(10)
11:00	保健体育 (100)	作業学習 (60)	生単 《情報》 (50)	休憩(10)	生単 (100)
11:30			美 (100)		
12:10	給食 (40)	給食 (40)	給食 (40)	給食 (40)	給食(40) 特別活動
12:50	昼休み	昼休み	昼休み	昼休み	昼休み
13:20			ADL(20)		
13:40	生単 《道路学習》 (75)	作業学習 (75)	SHR(10)	作業学習 (75)	生単 (75)
13:45					
14:30					
14:45	ADL(10)	ADL(10)		ADL(10)	ADL(10)
15:00	SHR(10)	SHR(10)		SHR(10)	SHR(10)

高等部の教育課程について

Dスタディで学んだことを他の学習でも生かすという学習の結び付きを強化していく意図から，次年度は，Dスタディを高等部の教育課程の核と捉え，学習内容を調整したり，追加したりして教育課程を組んでいく(図12)(表2)。

今後は，今年度の研究の成果を生かし，学習内容に「はたらく」「くらす」「たのしむ」のどの観点が含まれた学習かを意識して指導に当たることができるように，三つの観点で編成する枠組みを設定して，教育課程を編成する(図13)。

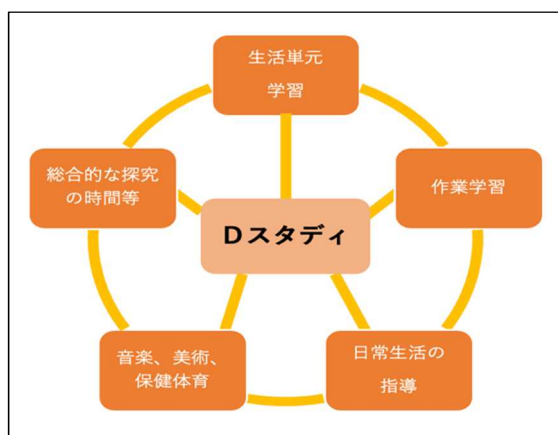


図12 Dスタディの位置付け

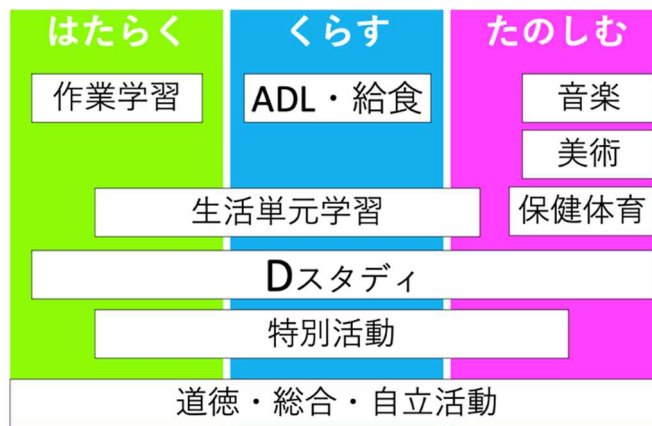


図13 高等部教育課程の枠組み

たのしむワーキンググループ

1 はじめに（研究の目的）

昨年度までの研究を通して、生涯学習力を高めるために、「知の欲求の充足」「必要に応じた情報収集、課題解決力」「学びに向かう力」「仲間づくりや良好な人間関係の形成」「社会とのつながり」「ライフステージに応じた学びの機会の設定」が必要であることが分かった。

たのしむワーキンググループ（以下：たのしむWG）では、「楽しむ」視点から生涯学習力を高める教育課程について考える。児童生徒が今もっている「楽しむ力」と、今後必要となる「楽しむ力」を明らかにし、児童生徒の生涯学習力を高める教育課程を編成するために必要なことについて検討する。

2 研究の内容と方法

(1) 期 情報収集・分析	「楽しむ力」という言葉の捉えの確認 ア WG職員によるワークショップ「楽しむ力とは？」 イ LLミーティング ミニビデオ研修会 ～児童生徒の「楽しむ姿」を見付けよう～ 生涯学習力「楽しむ力」についての研修会 ～夏のセミナー「楽しむ力を育むために必要なこと」～
(2) 期 実践	生涯学習力を育む授業実践 ア 授業づくり研修会の実施 イ 生涯学習奨励員の活用

3 研究の実際

たのしむWGでは、夏のセミナーまでを含めた 期と夏のセミナー後の 期と、二つに分けて研究を行った。 期では、「楽しむ」という視点から考える生涯学習力について、情報を収集し分析した。 期では、集めた情報を基に生涯学習力を育むための授業実践を行った。

(1) 期 情報収集・分析

「楽しむ力」という言葉の捉えの確認

アWG職員によるワークショップ「楽しむ力とは？」

「楽しむ」という言葉は抽象的なものであり、その言葉からイメージするものは、一人一人違っている。言葉の定義やWGで話し合うテーマの対象範囲を曖昧にしたままでは、WGの目的の共有が十分に図ることができないため、言葉の捉えを明確にしておくことが必要だと考えた。たのしむWGでの研究を進めるに当たって、初めに「楽しむ」という言葉の捉えを共通理解した。

たのしむWG職員による付箋紙を用いたワークショップを行い、「楽しむ」という言葉からイメージされる活動、力、児童生徒の様子について、意見を出し合い、図にまとめた（図1）。出された意見を整理、分類すると大きく3つに分類できた。

「児童生徒が楽しんで活動している姿」に焦点を当てた意見

- ・映画、ダンス、カラオケ、工作、調理など

「どんなことに心が動くのか、児童生徒の内面的な心の動き」に焦点を当てた意見

- ・想像力、気付く力、試す、作り出す喜び、感謝される喜びなど

「活動を楽しむために必要となる力」に焦点を当てた意見

- ・友達と関わる、表現力、活動の場の広がりなど

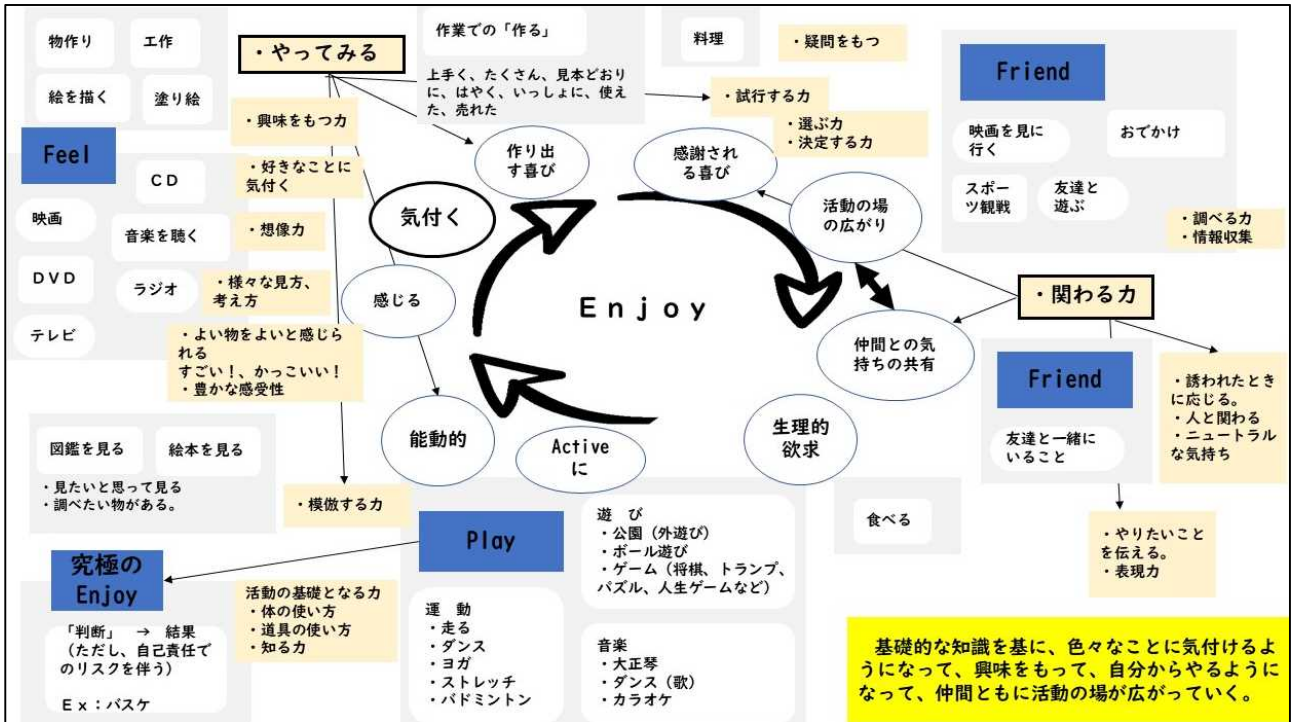


図1 ワークショップ「楽しむ力とは？」

ILLミーティング ミニビデオ研修会～児童生徒の「楽しむ姿」を見付けよう～

生涯学習力を高めるためには、様々なヒト、モノ、コトに触れて心を動かしたり、自分が好きなことに気付いたりする経験を十分に積み重ねることが必要である。子どもの心の動きは、表情や仕草など細かな変化に表れるものの、客観的には把握しにくい。子どもたちが何をしたのかという客観的な事実から、子どもたちが何を感じ、何を思ったのかという心の動きを教師が推察し、子どもの内面を捉えていく必要があると考えた。ミニビデオ研修会では、各学部から事例対象の児童生徒を取り上げ、どのような場面で楽しんでいたか、どのように楽しみを見付けていたか、心の動きを推察した(図2, 図3)。



図2 中学部美術科「むすんでつなげよう」



図3 高等部美術科「うちわを作ろう」

ワークショップで出された意見に加え、授業の中で見取った児童生徒の楽しむ姿や楽しむ力を整理して分類すると、楽しむには、「楽しい活動」と「活動そのものを楽しむ力」があることが分かった。また、楽しむ力には、没頭したり、夢中になったりする力など、「自ら活動に向かう原動力になる力」と「人とつながり、集団の中で発揮される力」があることを、たのしみWG職員で共通理解を図り、その後の研究を進めた。

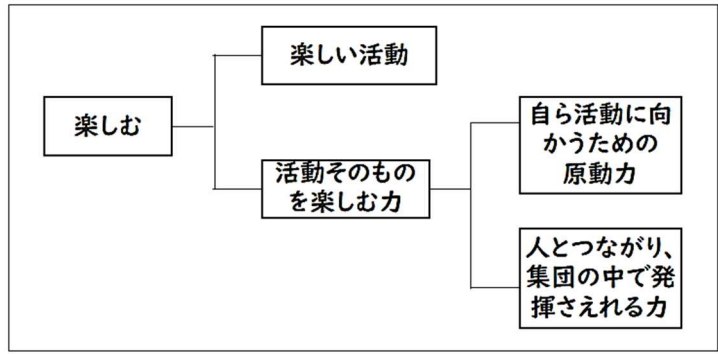


図4 「楽しむ」の捉え

生涯学習力「楽しむ力」についての研修会

夏のセミナーでは、生涯学習に関連した教育活動として二校の事例発表と、研究協力者によるシンポジウム～「楽しむ力」を育むために必要なこと～を行い、次のような示唆を得た(図5)。

夏のセミナーでいただいた助言

夢や願いが実現されている状態は、「楽しむ力」が発揮されている状態

秋田公立美術大学准教授 安藤 郁子 先生

教師も子どもも一緒に、造形活動を楽しむことが必要

秋田大学教職大学院教授 長瀬 達也 先生

学校以外にも「楽しむ力」を培い、発揮できる場がある

秋田県生涯学習センター社会教育主事補 栗田 寿 先生

夏のセミナーシンポジウム『楽しむ力』を育むために必要なこと
Graphic recording by NPO法人「アーツセンターあきた」 齊藤

図5 夏のセミナーで頂いた助言

期(情報収集・分析)の取組を通して、生涯学習力を育むためには、様々なヒト、モノ、コトに触れながら「あっ!」「おもしろい」「やってみたい」と心が動く経験を積み重ねること、「没頭する経験」、「様々な人との関わり」が特に大切だと考えた。様々なことに取り組み中で、自分ならではのやりがいや面白さ、楽しさを見つけて深めていくことができる。そこに、「様々な人との関わり」が加わることで、新たな発見や気づきが生まれ、そして興味・関心が広がるという好循環が生まれる(図6)。この循環は、生涯にわたって学び続けるために、重要なことだと考える。

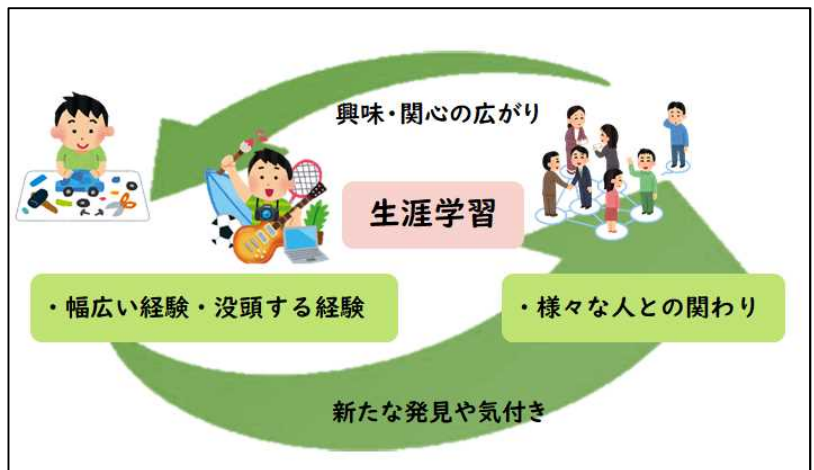


図6 生涯学習力を育むために必要なこと

(2) 期 実践

期では、期の取組から導き出された「幅広い経験」、「没頭する経験」、「様々な人との関わり」をどのように学習活動の中に取り入れていくことができるか、実践を通して検討した。

生涯学習力を育む授業実践

ア授業づくり研修会の実施～様々な人との関わりからの視点から～

夏のセミナーを通して、秋田公立美術大学准教授安藤郁子先生から「夢や願いが実現されている状態は、『楽しむ力』が発揮されている状態である」との示唆をいただき、「児童の願い」を実現できるようにするための支援が必要なことを改めて確認した。また、生涯学習という視点から子どもたちの学びを考えたときに、「地域の中で発揮できる力」が育まれているかという疑問をもった。学校の中だけで「楽しむ力」を育むのではなく、今もっている「楽しむ力」をどのように地域の中で発揮できるようにしていくか、地域と一緒に子どもたちの「楽しむ力」を育む必要があると考えた。

そこで、たのしむWGでは、「児童の願い」を地域の方と共有し、一緒になって支援について考える授業づくり研修会を実施した(図7)。児童が利用している放課後デイサービス職員、地域の生涯学習を推進する生涯学習奨励員等を招いて、「児童の願い」を共有し、それぞれの立場でできることを一緒に考えた。



図7 授業づくり研修会
ふたば学級図画工作科「びりびりぺたぺた」

授業づくり研修会の進め方

- 1 図工で見つけた さんの楽しむ姿の紹介
- 2 願いの共有
「将来地域の中でこんなふうに生活を楽しみたい(楽しんでもらいたい)」
- 3 願いを実現するために必要となりそうな力の検討(今もっている力とこれから育てていきたい力)
- 4 その願いを実現するためにそれぞれの立場で今できること、一緒にできること

研修会后、本校職員で図画工作科の年間指導計画を見直す。

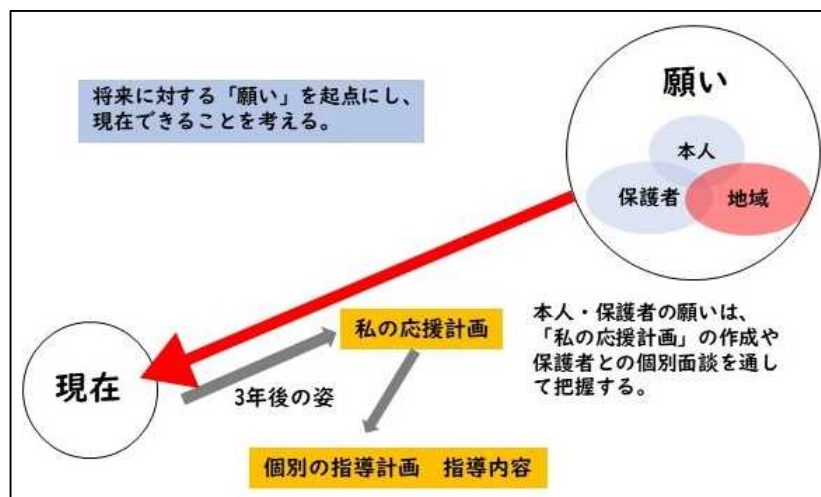


図8 「将来の姿，願いを起点にした授業づくりのイメージ」



図9 授業づくり研修会ワークショップ

授業づくり研修会「4 それぞれの立場
でできること」で出された意見(抜粋)

- ・もっと子どもたちと一緒に活動したい。(生涯学習奨励員)
- ・いろいろな素材に触れる場を提供することができる。(NPO法人アートリンクうちのあかり)
- ・先輩との関わりの場を設ける。(本校高等部職員)
- ・デイサービスの職員が学校に来られるようにする。(放課後児童デイサービス職員)

授業づくり研修会を通して、以下のことが分かった。

- ・児童生徒には、すでに生まれている「楽しむ力」がたくさんある。
- ・子どもの願いを実現するために、生涯学習力を育むために、学校でできること、「地域」でできることがある。
- ・子どもたちの生涯学習に関わりたい、子どもたちのニーズに応えたいという地域の声がある。

以上のことから、次のような取組をすることが生涯学習力を育む上で有効であり、必要なことではないかと考えた。

- ・生涯学習の視点で子どもの姿を捉えるには、「心の動き」に着目した見取り方をする。
- ・地域を活用した授業を行うだけでなく、計画段階から地域と学校が一緒になって授業を考えていく必要がある。
- ・「様々な人との関わり」の機会を確保し、子どもたちの生涯学習を支えるためにも、生涯学習奨励員の活用が有効ではないか。

イ生涯学習奨励員の活用

小学部では、生涯学習奨励員を招いて、図画工作科「わくわくねんどランド」の授業を行った。生涯学習奨励員を活用する目的としては、児童にとっては、様々な表現の仕方に触れたり、作りたいもののイメージを広げたりすること。教師にとっては、児童が奨励員の方と一緒に造形活動するとき働いている児童の「楽しむ力」や、もっと楽しむために必要となる力を知ることを目的とした。



図10 生涯学習奨励員を活用した授業実践

生涯学習奨励員を活用した授業実践の成果と課題

成果

- ・奨励員が作った作品を見て、「同じように作ってみたい!」と活動を模倣したり,新たな発想へと広がったりする様子が見られた。
- ・奨励員を粘土遊びに誘い掛けたり,一生懸命に作った作品を見せたりする様子があった。

課題

- ・「自分から粘土に働き掛け,形の変化に気付いたり,粘土を通して自分の思いを表したりする」ための手立てや活動が十分ではなかった。
- ・図画工作科のねらいを達成するための支援が十分にできていなかった。

4 まとめ～「生涯学習力」を育む教育課程編成のポイント～

たのしむWGでの取組から,楽しむ視点から考えられる生涯学習力を高める教育課程編成のポイントについて,次の二点を提案する。

一点目は「学ぶ楽しさ」を実感できるようにすることである。様々なことに触れ,心を動かす経験を積み重ねる中で,「楽しいからもっとやってみたい」,「楽しいから,次はこうしてみたい」というように「楽しいから〇〇したい」という思いを学校生活の中で味わっておく必要がある。このような「学ぶ楽しさ」を十分に味わい,生涯学習力の基礎をつくることで,卒業後も生涯にわたって学び続ける児童生徒を育むことができるのではないかと考える。

二点目は「地域と共に」子どもたちの学びを支えることである。たのしむWGでは,地域の力を授業に活用するだけでなく,授業の計画段階から活用することを行ってきた。これまでも学校が主体となって地域資源・人材を活用した取組は行われてきたが,これからは,より地域と一緒にになって児童の学びを支えていく必要がある。将来,児童生徒が暮らす「地域」を十分にイメージできるようにしたり,必要に応じて地域の力を活用した取組を行ったりすることが,児童生徒の生涯学習力を高めるために必要である。また,今,育もうとしている力は地域の中でも発揮できる力なのか,学校だけで行っていた取組を地域の中でできないか,見直す必要がある。

生涯学習力を育むには,「学ぶ楽しさ」と「地域と共に」の両方の視点が必要不可欠である(図11)。この二つを両輪にして,児童生徒の生涯学習を推進していきたい。

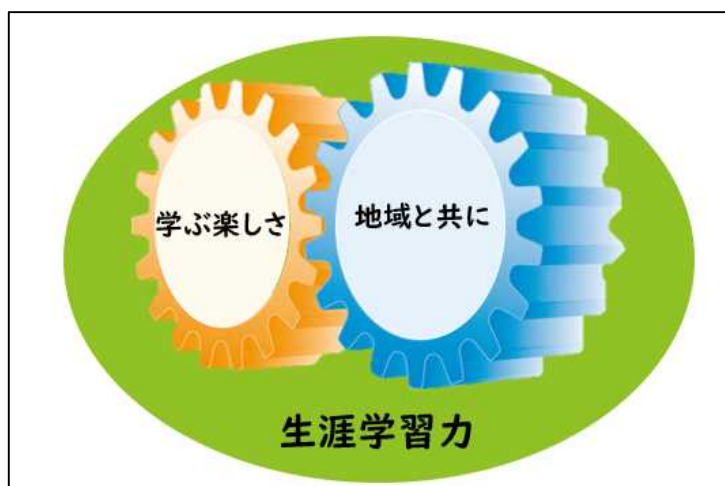
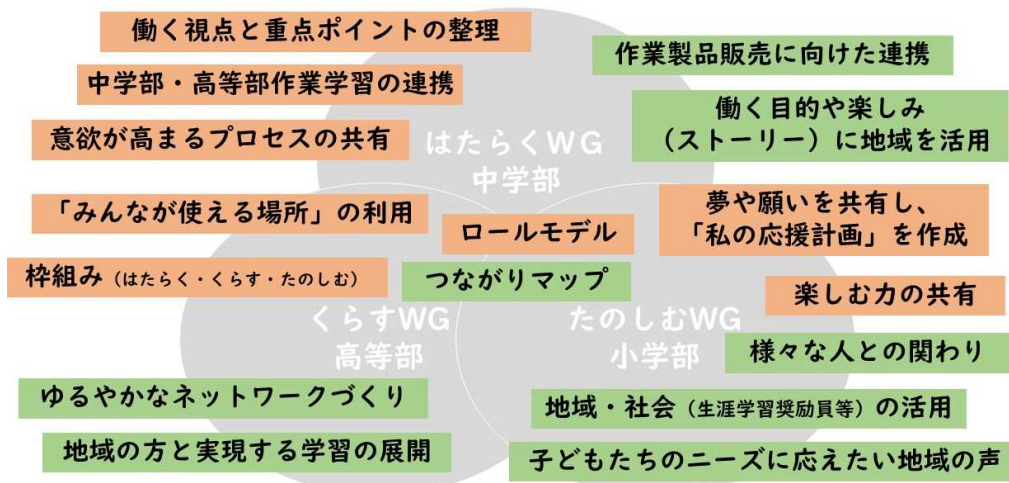


図11 教育課程編成のポイント

研究のまとめ

1 教育課程編成への提言

昨年度の基礎研究に基づき、今年度は「生涯学習力」を高める教育課程を編成するために、全校縦割りで「はたらく」「くらす」「たのしむ」の3つのワーキンググループ（以下WG）をつくり、LLミーティングを中心に研究を推進してきた。研究のゴールが教育課程編成であるため、縦割りグループだけでなく、学部単位や必要に応じて全体で共有する機会も設定した。各WG、各学部の話合い・実践から見えてきたことをキーワードで挙げると次のとおりである。



これらはどれも、生涯学習力を高めるために必要なこと、教育課程を編成するための鍵になる。これらのキーワードを「時間軸」「空間軸」の2つの軸で整理すると、次のようになる。



「時間軸」では小学部・中学部・高等部という時間の流れ、児童生徒個々の成長につながるキーワードが多い。これらは時間の経過や学習によって積み重なっていくが、積み重ねの機会を教育課程の中に意図的に入れ込むことで、より効果的に積み重ねられると期待できる。

「空間軸」では児童生徒、学校を取り巻く環境、地域社会という空間的な広がりに関するキーワードが多い。児童生徒の「生涯学習力」を高めるためには、学校がどんどん地域に開かれて、地域と結び付いていくことが大切であると考えられる。

これら2つの軸を、木の幹をイメージした「学びの積み重ね」と木の枝葉をイメージした「学びのネットワーク」とし、本校の教育課程編成のベースである「私の応援計画」の上に重ねると右のようになる。「私の応援計画」にしっかりと支えられ、学びの積み重ねを行うことで木の幹の太さが増し、ぐんぐん上へと成長していく。同時にたくさんの枝や葉が成長し、学びのネットワークの広がりも見られるようになる。

この図を、児童生徒の「生涯学習力」を高める教育課程編成のイメージ図とした。

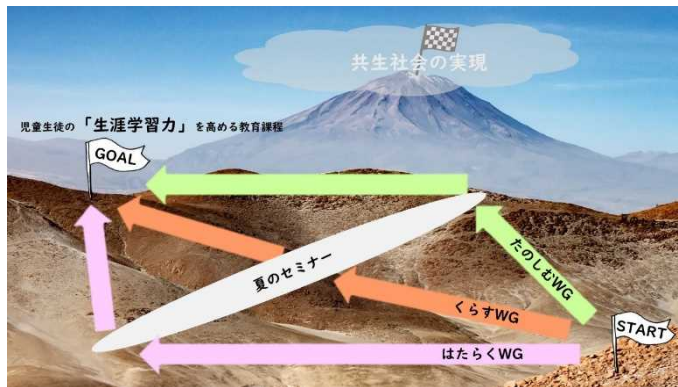


2 成果と課題

(1) 成果

年間14回のLLミーティング(実施単位はWG,各学部,全体)を実施した。研究の中心となるWGは、「はたらく」「くらす」「たのしむ」の3グループを編成した。昨年度のWGでの研究に引き続き,全職員が教育課程を編成するという高い意識で研究に参加することができた。

また,見えにくい「生涯学習」「教育課程編成」というテーマ設定だったが,授業や児童生徒の姿という学校の中の視点だけではなく,学校卒業後の姿(働く・暮らす・楽しむ)も含めて検討したことで,職員一人一人が生涯学習についての理解を深め,広い視野で教育課程編成を考えることができたとともに,実践場面で児童生徒の主体的にヒト・モノ・コトに関わり学ぼうとする姿をたくさん見ることができた。今年度の研究を生かし,来年度実践していく教育課程は次のとおりである。



興味・関心を広げ,余暇の充実につなげたい
豊かな人との関わりを通して,楽しむ力を育みたい

小学部

Enjoy タイムの新設

生涯学習奨励員の活用



働く意欲を高めるストーリーをつくりたい
自分自身を知るための気づきの機会を増やしたい

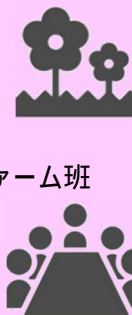
中学部

作業学習作業班の再編成

クラフト班,ハーブ加工班,紙工班

クラフト班,ソーイング班,ファーム班

中高生徒代表者会議の設定



自ら課題に向かい,解決しようとする力を育てたい
何につながる学習か意識できるようにしたい

高等部

問題発見・解決型学習

「Dスタディ」の新設

教育課程の枠組みを

「はたらく」「くらす」「たのしむ」に変更



地域と共に子どもを育て,共生社会を目指したい
地域を知り,地域を活用するためのツールを作りたい

全体・その他

地域の積極的な活用

マップ作成と活用



(2) 課題

「はたらく」「くらす」「たのしむ」の3つのWG中心の研究だった。学部単位や全体でのLLミーティングの機会はあったが,各WGの研究内容が多いことと,WGごとに進め方が異なったために,十分に共通理解するには至らなかった。また,今年度は教育課程編成に力を注いだため,授業づくりや児童生徒の変容を検証する場面が少なかったという意見もあった。今後,新たな教育課程での実践を重ね,児童生徒の「生涯学習力」が高まったかどうか,そして「生涯学習力」を高めるための教育課程となっているかどうかの検証・評価・改善をしていきたい。

【引用・参考文献】

- (1) 秋田大学教育文化学部附属養護学校 「生活する力を高める指導」研究紀要第 20・21・22・23・24・25 集, 1994・1995・1996・1997・1998・1999
- (2) 秋田大学教育文化学部附属養護学校 「個々の指導目標を最適化する試み～個別指導計画書の作成と活用～」研究紀要研究紀要第 26・27・28 集, 2000・2001・2002
- (3) 秋田大学教育文化学部附属養護学校 「指導内容や指導方法の改善に役立つ評価の在り方」研究紀要第 29・30 集, 2003・2004
- (4) 秋田大学教育文化学部附属養護学校 「ライフステージに応じた教育的ニーズにこたえる教育課程づくり」研究紀要第 31・32・33 集, 2005・2006・2007
- (5) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「教育的ニーズに応える授業づくり」研究紀要第 34・35 集, 2008・2009
- (6) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「子どもが主体的に生きる姿を目指した授業づくり」研究紀要第 36・37 集, 2010・2011
- (7) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「人とかかわる力を高める授業づくり」研究紀要第 38・39, 40 集, 2012・2013・2014
- (8) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「ひと・地域・未来をつなぐ」研究紀要第 41・42・43 集, 2015・2016・2017
- (9) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「本人主体の個別の教育支援計画(私の応援計画)を活用した教育課程の編成」研究紀要第 44・45 集, 2018・2019
- (10) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「児童生徒の『生涯学習力』を高める教育課程の編成」研究紀要第 46 集, 2020
- (11) 有賀三夏(2018) 「自分の強みを見つけよう 『8つの知能』で未来を切り開く」ヤマハミュージックメディア
- (12) 上岡一世(2013) 「キャリア教育を取り入れた特別支援教育の授業づくり」明治図書出版
- (13) NPO法人 障がい児・者の学びを保障する会(2019) 社会(地域・福祉・企業の連携システム)が支える, 学校教育終了後から生涯にわたる継続的な学びの実践研究事業 ~コミュニケーション経験を基盤とする生活・就労支援プログラムの構築 ~(報告書)
- (14) 亀井 浩明・有園 格・佐野 金吾(1997) 「中教審答申から読む 21 世紀の教育」ぎょうせい
- (15) 鯨岡 峻(2005) 「エピソード記述入門 実践と質的研究のために」東京大学出版会
- (16) 櫻井茂男(2017) 「自立的な学習意欲の心理学 自ら学ぶことは,こんなに素晴らしい」誠信書房
- (17) 志水宏吉・若槻健(2017) 「『つながり』を生かした学校づくり」東洋館出版社
- (18) スティーブ・ホルバーン ピーター・M・ピーツェ(2005) 「PCP(本人を中心に据えた計画づくり) - 研究, 実践, 将来の方向性 - 上巻」相川書房
- (19) スティーブ・ホルバーン ピーター・M・ピーツェ(2007) 「PCP(本人を中心に据えた計画づくり) - 研究, 実践, 将来の方向性 - 下巻」相川書房
- (20) 全国特別支援学校知的障害教育校長会(2019) 「知的障害特別支援学校における深い学びへのアプローチ」東洋館出版社
- (21) 武富博文(2017) 「知的障害教育におけるアクティブラーニング」東洋館出版社
- (22) 田中良三・藤井克徳・藤本文朗(2016) 「障がい者が学び続けるということ 生涯学習を権利として」新日本出版社
- (23) 丹野哲也・武富博文(2018) 「知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメント」東洋館出版社
- (24) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(2018) 「障害者の生涯学習活動に関する実態調査」平成 29 年度文部科学省委託事業 「生涯学習施策に関する調査研究」

- (25) 富山大学人間発達科学部附属学校園「専門家として学び合い高め合うための校内研修の在り方」共同研究プロジェクト(2019)「実践！特別支援教育のアクティブラーニング 子どもの内面を捉え、学びの過程に寄り添う教員研修」中央法規出版
- (26) 内閣府(2020)「障害者基本計画」
- (27) 中島好美・奥住秀之・國分充(2014)「知的障碍児・者におけるプランニングの特徴と支援」東京学芸大学平成25年度広域科学教科教育学研究経費研究報告書「知的障碍児のプランニングと抑制機能の支援に関する基礎的・実践的研究」
- (28) 西村修一(2015)「教育における合理的配慮の考え方の課題と合理的配慮決定のプロセス」
- (29) パウンド(2019)「60分でわかる！SDGs超入門」
- (30) 花熊暁(2014)「進まぬ、個別的教育支援計画に迫る」特別支援教育研究2
- (31) 藤井慶博(2016)「個別的教育支援計画の作成と活用に関する現状と今後の方策～特別支援学校教員に対する質問紙調査から～」秋田大学教育文化学部紀要
- (32) 古井克憲(2010)「知的障害者に対するパーソン・センタード・プランニングの実践～特別支援教育や障害者地域生活における『本人を中心に据えた計画づくり』を目指して～」和歌山大学教育学部紀要 教育科学 第60集
- (33) 本田恵子(2006)「脳科学を活かした授業をつくる～子どもが生き生きと学ぶために～」みくに出版
- (34) 丸山啓史(2016)「知的障害者の余暇をめぐる状況と論点」障害者問題研究 第44号巻 第3号
- (35) 文部科学省(1981)「生涯教育について(答申)」中央教育審議会
- (36) 文部科学省(2010)「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」
- (37) 文部科学省(2010)「特別支援教育の在り方に関する特別委員会 論点整理」
- (38) 文部科学省(2012)「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 報告」
- (39) 文部科学省(2012)「障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告(第一次まとめ)」
- (40) 文部科学省(2016)「教育課程企画特別部会 論点整理」
- (41) 文部科学省(2016)「個別の指導計画」と「個別的教育支援計画」について
- (42) 文部科学省(2017)「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部)」
- (43) 文部科学省(2017)「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)」
- (44) 文部科学省(2017)「特別支援学校学習指導要領解説 総則編(幼稚部・小学部・中学部)」
- (45) 文部科学省(2017)「特別支援学校幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領」
- (46) 文部科学省(2018)「学校卒業後における障害者の学びの推進方策について(論点整理)」
- (47) 文部科学省(2018)「障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について」
- (48) 文部科学省(2018)「第3期教育振興基本計画」
- (49) 文部科学省(2019)「障害者活躍推進プラン -障害のある人の力を生かして未来を切り開くために必要な5つの政策プラン -」
- (50) 文部科学省(2019)「障害者の生涯学習の推進方策について(通知)」
- (51) 文部科学省(2019)「障害者の生涯学習の推進方策について 誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して (報告)」
- (52) 文部科学省(2019)「特別支援学校高等部学習指導要領」
- (53) 涌井恵(2014)「学び方を学ぶ 発達障害のある子どももみんな共に育つユニバーサルデザインな授業・集団づくりガイドブック」ジアース教育新社
- (54) 涌井恵(2015)「発達障害のある子とUD(ユニバーサルデザイン)な授業づくり 学び方にはコツがある！その子にあった学び方支援」明治図書出版

あとがき

学校も含めてあらゆる職場には、公式な時間である「組織の時間」(計画に基づいて実施される会議や研修会等)と、基本として自分一人で仕事をする時間である「個人の時間」、そしてその中間に位置する「集団の時間」という3つの時間区分があると言われています。

3つめの「集団の時間」は、ホンダ流「ワイガヤ」として紹介されている、何人が集まってワイワイガヤガヤ意見や情報の交換をする時間です。ワーキンググループでの話し合いは基本的に組織の時間として設定しましたが、実際にその場に行くと、途中から何人かの小グループに分かれて議論したり、予定した時間が終わった後で、数名がその場に残って意見交換を続けたりすることがしばしば見られました。公式ではありませんから、「集団の時間」は突然始まったり、近くにいると意図せず巻き込まれたりすることがあります。実際、ワーキンググループでの話し合いをのぞきに行った私が巻き込まれることがしばしばありました。逆に、自分から進んで話し合いの輪に加えてもらったこともありました。若干当初のテーマとは違っていたり、全く別の視点からの意見交換だったりすることもあります。しかし、そのインフォーマルな場から新しい視点が見付かったり、方向性の整理や転換をしたりすることもできたような気がしています。

今回の研究は、そもそも学ぶとはどういうことか、そして学び続けるためにはどんな力が必要なのかという、原初的で素朴な問いからスタートしました。従って、特別な支援を必要とする子どもたちにとってというよりも我々教員も含めて、一人一人の人間が生涯にわたって学び続けることの意義とその原動力に関する考察が必要でした。研究は難しいという経験をするのもしばしばですが、何かに気付いたり分からなかったことが少しずつ解決に向かったりする経験は、誰にとっても楽しいことです。そういう経験を積み重ねていくうちに、全体を俯瞰して見ることができるようになってきて、自分の挑戦の意味が分ると、さらにまたやってみようという気持ちが湧いてきます。子どもたちの学びについて考えてきたこの2年間の研究を通して、学びを再定義し、改めてそのデザインをしてみました。そして、研究成果を教育課程編成の一試案としてまとめることができたことで、我々教師もこれからまた学び続ける力を得ることができました。

ここ数年、働き方改革における残業時間の縮減という課題が話題になっています。また、新型コロナウイルスの感染拡大状況も、なかなか終息の見通しがたちません。こうした中、「集団の時間」が長いのは、逆行する取組になる側面があるのかもしれませんが、しかし、生涯学び続けていく力の重要性を考えると、これからの新しい時代においては、ワイワイガヤガヤの機会を大事にしていくことがむしろ重要なのかもしれません。

今回も、研究を進めるに当たってたくさんの皆様から御協力をいただきました。この2年間は、「組織の時間」への御協力に加えて、私たちの「ワイガヤ」へ参加していただいたり、そういう機会を仕掛けていただいたりする形でも力をお借りしました。感謝申し上げます。

研究同人（2020年度）

校長	藤井 慶博	教諭	齋藤 明
副校長	跡部 耕一	教諭	阿部 圭但
教頭	相場 力	教諭	石成 舞
主幹教諭	櫻田 佳枝	教諭	今井 彩
教諭	目黒 晃子	教諭	坂根 瞳
教諭	島津 真奈美	教諭	今野 文龍
教諭	伊藤 学	教諭	森田 紗也子
教諭	鈴木 暢子	教諭	佐藤 美里
教諭	菊地 雄平	教諭	伊藤 智華子
教諭	本多 勝成	教諭	樋渡 実由梨
教諭	黒木 良介	教諭	伊岡森 真由
教諭	下村 光行	教諭	加藤 茜
教諭	高橋 浩樹	養護教諭	佐藤 麻衣子
教諭	後松 慎太郎	任期付教諭	田村 千賀子
教諭	相原 淳	教育系スタッフ	大友 翔矢
教諭	加藤 俊之	教育系スタッフ	伊藤 千聡

研究協力者（秋田大学）

原 義彦
長 瀬 達也
前 原 和明

秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 第43号別冊
附属特別支援学校・令和2年度研究紀要 第47集

印刷・発行 令和3年3月
発行 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校
〒010-0904 秋田市保戸野原の町7-75
TEL 018-862-8583
FAX 018-862-8525
HP <http://www.sh.akita-u.ac.jp>
Mail fuyo@sh.akita-u.ac.jp
